



Title	言説に見るミース・ファン・デル・ローエの建築理念に関する研究
Author(s)	岩田, 章吾; 足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 2006, 48, p. 17-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言説に見るミース・ファン・デル・ローエの建築理念に関する研究

岩田章吾／足立裕司

神戸大学／神戸大学

キーワード

ミース・ファン・デル・ローエ, 近代, 時代精神, 有用性,
ユニヴァーサルスペース

Mies van der Rohe, Modernity, the Will of the Epoch,
the idea of Utility, Universal Space

1. はじめに
2. 研究対象と方法
3. 建築と時代の関係の変遷
 - (1) 1922年「Hochhäuser」に見る建築と時代の関係性
 - (2) 1923年-1924年のミースの言説に見る建築と時代の関係性
 - (3) 1924年の講演
 - (4) 1925年-1937年のミースの言説に見る建築と時代の関係性
 - (5) 1938年-1969年のアメリカ期のミースの言説に見る建築と時代の関係性
 - (6) 言説の変遷
4. 考察：言説と空間表現
5. まとめ

1. はじめに

ルードヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ (Ludwig Mies van der Rohe, 1886-1969. 以下ミースと記す) は近代の巨匠といわれる建築家の中, 自らの考えを書籍などまとめた形で理論としてまとめることのなかった建築家であった。元来寡黙なタイプであったミースは, ドイツ時代においても言説は少なかったが, アメリカに活動の場を移して以降はより一層言説によって建築を説明することを行わなくなっていた。そのため, ミースの言説から建築を理解しようという試みはこれまで十分に行われてきたといえなかった。本研究はミースの言説の特質からその建築理念に光を当てようとするものである。ミースの建築に関する言説はそのほとんどが時代との関係においてなされているため, 本研究ではミースがその言説の中で建築をどのように時代と関係づけているか, またその関係性がどのように変遷したかに焦点を絞る。

ミースの言説に焦点を絞った先行研究は少なく, 1986年のフリッツ・ノイマイヤー (Fritz Neumeyer) による『ミース・ファン・デル・ローエ：ダス・クンストローゼ・ヴォルト：ゲダンケン・ツール・パウクンスト (Mies van der Rohe: Das kunstlose Wort: Gedanken zur Baukunst¹⁾)』が最初の本格的なミースの言説の分析といえるであろう。ノイマイヤーの研究が包括的であるのに対して, 本研究はミースの建築概念と時代との関係に焦点

を絞り、そこからミースの建築理念の特質を考察していく点において、ノイマイヤーと異なる目的を有していると考ええる。

2. 研究対象と方法

本研究では現在確認されているミースの言説のうち、マニフェスト、論説など公に発表したものおよび、講演の原稿など発表を前提に書かれたものすべてを対象²とし、それらの中から以下の3つの点に関する記述を抽出、リスト化し、建築と近代の関係についてミースの認識を読み取り、分析する。

- 1：建築の定義、または建築や空間の理念についての記述
- 2：時代について、または工業化、合理化、有用性、機能などの近代の特性についての記述
- 3：デザインに対する態度、および建築家の役割についての記述

この3つのカテゴリーは相互に関連しており、言説が複数のカテゴリーにわたることは言うまでもなく、あくまで便宜上のものである。3に関しては直接建築と時代に関連していないが、建築家の役割や態度は近代、とくに1920年代の近代に関する認識を理解する手がかりとなると考え項目に加えた。また同一の言説の中に、同じような表現が繰り返される場合は代表的な一文をもって代表させた。リストは便宜上ドイツ期とアメリカ期の二つに分けて作成した。(表1、表2)

3. 建築と時代の変遷

ミースの建築家としての活動は1907年のリール邸からと考えられるが、ミースの言説は、1922年の『フリュールリヒト (*Frülicht*)』の最終号に発表した「高層建築 (Hochhäuser)」が最初であり、それ以前の言説は発見できなかった。また、言説は1920年代から1930年までは盛んに発信されるものの、それ以降極端にその数が少なくなっている。八束はじめ氏が指摘するように、このことは、1920年ごろは無名であったミースが、自己宣伝のために盛んに自らの考えを発信したのに対して、ドイツ建築界で重要な位置を占めるにいたった30年代以降はむしろ戦略的に発言を行わなくなったためと考えられる³が、同時に、ドイツ期の30年代以降はナチスドイツの政権下でその発言を控えていた、または発言の機会が奪われていた可能性も考えられる。

表1：ミースの言説に見る時代認識（ドイツ期）（言説の末尾の番号は脚注2の文献番号を示す）

年	主な作品	建築の定義、または建築および空間コンセプト	時代について、または、工業化、合理化、有用性、機能など近代の特性について	デザインに対する態度および建築家の役割
1907-20	リール邸 クローラー邸 ビスマルク記念碑			
1921	フリードリッヒ街の高層建築			
1922	ガラスの高層建築	芸術的形態化のための必要な基盤としての構成的思考(1)		私はフラットなガラス面による非人間性を避けるため、それぞれのファサードをほかの面に向かって少しずつ傾けた(1) ガラスの使用は反射の豊かな交錯のためである(1) ガラスの高層建築の曲面は内部の採光と、都市のコンテクストに対する建築のボリュームと望ましい光の反射の戯れによって決定された(1)
1923	コンクリートのオフィスビル レンガ造田園住宅 コンクリート造田園住宅	建築は空間的に捉えられた時代の意志である(2) 建築は建築家にとって理論でも美学でもなく、空間的に捉えられた時代精神である(3) 現代性だけが形＝形式となりうる(2) 我々の時代の手段によって、本質から形を生み出そう(2)		あらゆる美学的思索、理論、形式主義を我々は否定する(2) もし、我々が合理的経済とテクノロジーに従うならば、我々に時代の集合住宅はその（あるべき）形式を見出す(5) 今日の建築の美学的なものから有機的なものへの、形態から、構成への発展(3) 我々はこの時代の建築に絶対的な真実性を求め、形態的なごまかしを拒否する(5) 建築行為を美学的思索から開放する(4) 建築家の作品は生命に奉仕し、生命だけが彼らの師となるのだ(3)
1924		建築はいつの時代においても空間的に捉えられた時代精神である(6) 空間表現としての建築はその時代と精神的につながっており、その時代の手段によってその重要な役割を果たすことによって自らを明らかにする(8) 建築目的がその建物の意味である(6)	我々の時代は感傷的なものではない。我々は大きなジェスチャーではなく、合理性と現実にも価値を見出す(6) もし、我々がこの工業化の実現に成功したならば、社会的、経済的、技術的、そして、芸術的問題でさえおのずと答えを見出すであろう(7) 機械化はゴールにはなりえない。それは精神的な目的のための手段にすぎない(8)	平面的多角形のカーブは豊かな光の反射のためである(8) 個人はますます重要ではなくなってきている(6)
1925				
1926	K. リーブクネヒトとR. ルクセンブルクの記念碑	建築は精神の決断の空間化であり、それは時代と結びついており、その時代の手段によってその重要な役割を果たすことによって自らを明らかにする(1)		
1927	ワイゼンホフのジードルンク アダムビル アフリカ街の集合住宅	新しい住宅の問題は基本的に精神の問題であり、新しい住宅の問題は新しい生活という大きな問題の一部に過ぎない(4)	合理化と標準化は単なる手段である。それは決して目的にはなりえない(4)	産業の合理化の掛け声のもとでの合理化と標準化の雄たけびは住宅の問題の一部に過ぎない。……それと同等か、あるいはより重要なものは精神の問題であり、これは計算や組織化によってではなく、(近代建築のリーダーたちの)創造力によってのみ解決されるのである。(8) その技術的、経済的側面にもかかわらず、今日の住宅の問題は建築の問題であり、それは複雑な問題であるが故、計算や組織化よりむしろ(近代建築のリーダーたちの)創造力によって解決される(5)
1928	アレキサンダー広場 再開設計画 アダムビル シュツットガルトのバンク計画	時代の知識、その役割や手段は建築家にとって必要な前提であるが、建築はいつの日も精神的決断の空間的表現である(9) 建築は賢明な思索の対象などではなく、ひとつの生命の営みとしてののみ理解できる。それは人間がその環境を自らに納得させ支配する能力のひとつの表現である(9) 時代の知識、その役割や手段は建築家にとって必要な前提である(9)	経済は支配を開始する。すべてはその支配下に置かれ、生産性が法となる。技術は経済的態度をもたらし、物質が権力に、量が質に妥容する(9) 経済は支配を開始する。すべてはその支配下に置かれ、生産性が法となる。技術は経済的態度をもたらし、物質が権力に、量が質に妥容する(9)	

年	主な作品	建築の定義, または建築および空間 コンセプト	時代について, または, 工業化, 合 理化, 有用性, 機能など近代の特性 について	デザインに対する態度および建築家 の役割
1929	バルセロナパヴィリ オン			
1930	チューゲンハット邸 戦争記念碑 ゲリケ邸	近代建築の問題を合理性のみによ って解決できるという考えることは根 本的な誤りである。① かつては必要とされた建築における 美は我々が自先の目的以上のものを 思い描くことによって得られる②	我々が今日実際的と呼ぶものは, い つかの時代にも実際的なもの, つまり, 意味深いものとは対立するものであ る。③ 合目的性だけではなく, 美を求め愛 することは自然な人間の特性である。 ④ 技術の強力な進歩により, (美を求 め愛するという) 自明の理が抑圧さ れている⑤ 有用性とは手段と目的の関係につ いての実践のカテゴリーであり, それ ゆえ, 実用を超越した実用主義は意 味を成さない。それは手段を目的に, 従属するものを原理に, 明らかな関 連性の欠如を人生の中身としよう としているのである⑥ これら機械化や合理主義などはその 致命的な, 価値を欠いた道を進むの である。重要なのはいかに我々がこ れら与えられた時代の事実に対して 自己を肯定するかであり, そこに精 神の問題が存在するのである⑦ 新時代とは事実である。それは我々 が好むと好まざるに関係なく存在す る。それはほかの時代よりいいとか 悪いとか言うものでもない。それは ただ与えられた, 未分化なもので ある。⑧ 我々は機械化, タイプ化, 標準化を 過大評価することはない⑨	
1931	ベルリン建築展	いかに機能や経済が近代建築に前提 となろうとも, その究極の問題は芸 術的な性質のものである。いかに機 能や経済が我々の建築を規定しよう とも, それらは, 建築の芸術的価値 に関してはなんら重要ではない。⑩		
1932	レムケ邸			
1933	ライヒスバンク計画			
1934	ブリュッセル万博ド イツ館			
1935	フッペ邸			
1936				
1937				

表2：ミースの言説に見る時代認識（アメリカ期）（言説の末尾の番号は脚注2の文献番号を示す）

年	主な作品	建築の定義, または建築および空間 コンセプト	時代について, または, 工業化, 合 理化, 有用性, 機能など近代の特性 について	デザインに対する態度および建築家 の役割
1938	レザー邸	そのもっとも単純な形式において建 築は完全に実用的配慮に根ざしてい るけれども, 価値のすべての段階を 精神的存在の領域に高めることで, 建築は, 感覚で理解できる, そして 純粋芸術の領域に到達できる⑪	目的によって, 我々はその時代独特 の構造に関連付けられている。一方, 我々の価値は人間の精神的本質に根 ざしている。我々の実用上の目的は その文明の性格を規定し, 我々の価 値はその文化の高みを規定する⑫ 我々はその時代を動かす力を理解す るようにならなくてはならない。我々 はその構造を材料, 機能, そして精 神の観点から分析しなくてはならな い。⑬ 材料から目的を経て創造的な作品を 作ることはただ, われわれの 時代の救いようのない混沌から秩序 を作り出すことである。⑭	われわれの仕事は目的と意味を解き 明かす上で, 以下の聖アウグスティ ヌスの深遠な言葉以上のものはない 「美は真実の輝きである」⑮
1939				
1940				

年	主な作品	建築の定義、または建築および空間 コンセプト	時代について、または、工業化、合 理化、有用性、機能など近代の特性 について	デザインに対する態度および建築家 の役割
1941 -42	IIT マスタープラン 小都市のための美術 館			
1943				
1944	IIT 図書館			
1945 -49	プロモントリーアパ ート			
1950	ファンズワース邸	建築が事物に依存しているのは事実 であるが、その活動の眞の領域は意 義の領域である。64 建築は精神の眞の戦場である。建築 は時代の歴史を記し、それに名前を 与えるのである。建築は時代に依存 する。それは、内部の構造の結晶化 であり、その形態のゆっくりとした 開示である。64	われわれを取り巻く混沌は秩序に道 を譲り、世界は再び意味深く美しい ものとなるであろう。63	
1951	レイクショアドライ ブアパート	建築芸術は今日や、永遠の恩恵では なく、時代の恩恵を受けているのだ。 歴史的活動だけがそれに生きる空間 を与え、それを満たすことを許す。 建築芸術は歴史的出来事、その内部 の動きの確実な表現である。63		
1952	IIT チャペル			
1953	マンハイムのナショ ナルシアター	建築は今日ではなく、時代に関連付 けられなくてはならない。66 我々はあまりに建築をスペクタクル として考えすぎている。66		
1954 -57	IIT クラウンホール			
1958	シーグラムビル			
1959				
1960	コロネードパークの アパートメント郡	いうまでもなく、毎月曜日に新しい 建築が発明される必要はないし、そ れは不可能でもある。68 私は建築と文明の間の強いつながり を理解している。建築は文明の支持 するダイナミックな力から発展しな くはならず、その最高の事例にお いて時代のもっとも深い部分の構造 を表現する。68	我々は時代の終わりではなく始まり にいる。我々の時代は新しい精神に よって決定され、新たな技術的、社 会的、そして経済的力によって動か される。68	
1961	シェファー美術館			
1962				
1963	ラファイエットワー			
1964	シカゴフェデラルセ ンター			
1965		眞の建築芸術はいつも客観的であり、 その属する時代の内的構造を表現す る。69 建築芸術はそのもっとも単純な形式 においてはまた、目的に根ざしてい る。しかし、精神的存在の最も高い 領域にいたるすべての価値を通じて、 純粹芸術の領域にいたるのである。 69		
1966				
1967				
1968	新国立ギャラリー			
1969	ドミニオンセンター			

文献から見ると、建築と時代の関係が大きく変容したのはミースが建築家として活動を開始したごく初期の1920年代のみであり、1930年代以降は大きな変容は見出せない。作品やドローイングなどではドイツ期とアメリカ期の間にはかなり大きな変容が見出せるが、これらの変遷と言説の変遷は一致しない。このことは、ミースの言説が観念論的であり、個々の建築につい

て具体的にはほとんど述べていないことが原因のひとつと考えられるが、八東氏が述べるように、戦略的に言説を発しているためとも考えられる。この章においてはミースの言説の変遷を見る。

(1) 1922年「高層建築」に見る建築と時代の関係性

1922年にブルーノ・タウト (Bruno Taut, 1880-1938.) による雑誌『フリュールヒト』の最終号にほかの表現主義者たちの作品に混じって発表された記事「高層建築」は、1921年のフリードリッヒ街のオフィスビル設計競技提出案を基にしたハンドドローイング (図2) と1922年に独自に計画したガラスの高層建築の模型写真及び平面図 (図1) とともに発表された。これはそれまで中庸な住宅作家でしかなかったミース⁴ が先進的な建築家としてはじめて発表したものと考えられる。フリードリッヒ街のオフィスビル計画は1920年のハンス・シャロウン (Hans Sharoun, 1893-1972.) の表現主義的ドローイングとの類似性が指摘されている⁵。しかし、添付されたテキストはこの建築が単なる表現主義の建築ではないことを伝えている。このテキストでは時代や、その特質に関する見解は提示されておらず、ミースの近代における建築の基本理念と、それを実践していくうえでのミースの態度のみが示されている。その内容は以下の5点に要約される。

- 1-① 建築家は建築をその本性から新しい形によって生み出さなくてはならない
- 1-② 構築的原理 (konstruktiven Gedanken) は芸術的形態形成 (künstlerische Gestaltung) のための基盤をなしている
- 1-③ 構築的原理は構造的法則性によって表現され、ガラスファサードはそれを表現する
- 1-④ 平板なガラスの利用による生氣のない表現は避けなくてはならない
- 1-⑤ 不定形なガラスのカーテンウォールは望ましい光の反射の戯れ (Spiel) を引き起こす

これらの要因のうち、1-①はミースのモダニストとしての基本的な立場を示している。一方、残りの要因からは二つの傾向が読み取れる。つまり、1-②、1-③の建築の構築的原理の反映を重視した側面と、1-④、1-⑤の人間の感覚に配慮した側面である。テキストの中では、彼は従来の高層建築ではその鉄骨の構造体によって表現される構築的原理が建築の建設過程のみに現れており、完成時には不透明な壁によって隠されていることを批判している。ミースは構築的原理を「芸術的形態形成 (künstlerische Gestaltung) のための基盤」と定義しており、外壁にガラスを利用すること、つまり、ガラスの透明性によって、この構築的原理を表

現としようと試みている。この文章からだけでは、ミースの構築的原理が何を意味しているかは十分には明らかではないが、少なくとも建築の本来的な法則性の表現を構築的原理とみなしていることが理解できる。

一方、構築的原理を表現するために採用された大きなガラス面が引き起こす、生気のない表現を避けるために、ミースはガラスのもうひとつの特性、反射性に注目している。ミースが反射性に託しているものは光の戯れという美的とも言える感覚であり、この経験によって構築的原理の徹底による生気のなさを緩和しようとしている。ガラスの反射による幻想的な経験による近代の物質性からの救済というモチーフは、表現主義のもつテクノロジーへのロマンティックな幻想、特に、パウル・シェーアバルト (Paul Scheerbart, 1863-1915) のガラス建築でおなじみのモチーフであった。しかしミースのガラスに対する態度はシェーアバルトのようなユートピア的なものではない、むしろ、構築的原理の徹底による生気のない表現をガラスの反射という表現によって緩和しようという調整的なものである。しかし、この段階で、ミースが若干でも構築的原理の徹底に対する疑問や危機感を抱いていたことは指摘できるであろう。ただし、この問題をガラスの配置や効果などの建築デザインによって回避できると考えていた点においては、この時点では、ミースは近代の技術と人間の感覚の調停をかなり楽観的に考えていたと思われる。

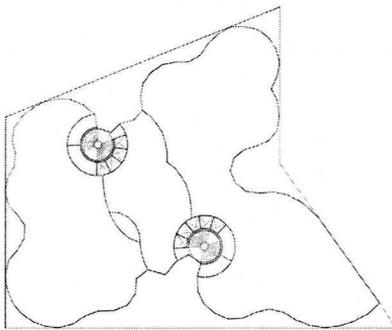


図1：ガラスの高層建築平面図

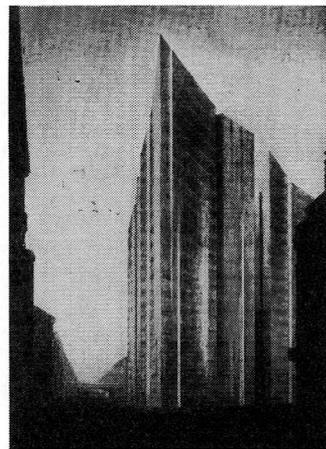


図2：フリードリヒ街の高層建築透視図

(2) 1923年-1924年のミースの言説に見る建築と時代の関係性

1923年、『G』の第1号にコンクリートのオフィスビルのドローイングとともに発表した「事務所ビル (Bürohaus)」以降、ミースの文章の調子はそれまでとは一変する。短い箴言か

らなる「事務所ビル」では、時代精神の名のもとにあらゆる美学的思索 (ästhetische Spekulation), 理論 (Doktrin), 形式主義 (Formalismus) が拒絶される。この時期の彼の論文や講演記録からは以前の表現主義の側面は完全に拭い去られ、かわりに即物主義の側面が支配的なものとなっている。当時のミースの言説の特徴をまとめるならば以下になるだろう。

2-① 建築は空間的に捉えられた時代精神である

2-② 工業化の実現によって、社会的、経済的、技術的、そして、芸術的問題は解決される

2-③ 合理性、特に経済、標準化、技術などが建築の決定要因であり、いかなる美学的思索も、形式主義も否定されなくてはならない。また、個人の独自性、主観性は恣意性の根源であり、その排除こそが客観性を生み出すものとして尊重されなくてはならない

2-①はこの時期のミースのモダニストとしての基本的な立場を示している。表現は異なるものの1922年の立場と大きな変化は見られない。この箴言はミースの建築家としての立場を示すものとして、しばしば引用されるが、実際にこの箴言は1923-1924年の一年の間しか使用されていない。一方、2-②では近代という時代は工業化の実現によってのみその問題を解決するという、即物主義的、技術決定論的な時代観が提示されている。2-③において、2-②を実現するための建築における方針が提示されている。1922年に1-②、1-③において見られた構築的原理を芸術的形態形成の基盤とするという考え方は、標準化、工業化といった技術的側面を極端に重視した、より即物主義的、技術決定論的なものとなっている。一方、1-④で示された構築的原理の徹底による生気のない表現を回避するといった考えはむしろ、美的なものとして排除されている。この時期においてもミースはガラスの高層建築を紹介はしているが、その説明においては、不定形のガラスのカーテンウォールは『フリュールヒト』で述べたような光の戯れを生み出すためといったものではなく、採光の効率性のみで説明されている。ミースのこのような立場の変更は、当時のドイツの社会風潮、知的文化的環境の変化⁶と『G』への参加による影響と思われる。

(3) 1924年の講演

この講演原稿はミースの時代認識が変容する過程に書かれたものであると考えられる。この原稿においてミースは、建築家は時代精神の道具でなくてはならない、機能がその建築の意味である、といった従来の主張を繰り返す一方で、建築はもはや空間的に理解された時代精神で

はなく、時代の精神的な空間的实践（der räumliche Vollzug geistig an ihre Zeit）と考えている。この講演では「精神的（geistigen）」という言葉は「物質的（materiellen）」と対比的に用いられている。つまりこの時点でミースは時代精神を、もはや以前のように、完全に物質的、客観的なものによって決定されるわけではないと考えていると考えられる。この講演において注目すべき点は、ミースが自らの立場を明らかにするためにヘンリー・フォード（Henry Ford, 1863-1947.）を引用している点である。1923年にドイツ語の翻訳が出版されたフォードの自伝は、当時のドイツの社会的風潮、ミースがそれまで主張していたような技術中心主義の礼賛、に対応するものとしてベストセラーになっていたからである⁷。

フォードの本がこのような強い反応をドイツで引き起こしているという事実ほどわれわれの置かれている状況を端的に示しているものはないだろう。フォードが望むものは単純かつ啓蒙的である。彼の工場は機械化のめまいがするほど完璧な姿をわれわれに示してくれるのである。われわれはフォードの向かう方向性に同意する、しかし、われわれは彼が向かっている場所自体は拒絶する。機械化は最終目的ではない、それは手段にとどまるべきなのだ。精神的な目的の手段に⁸。

フォードの自伝とミースの転向の直接的関係は不明だが、フォードの自伝で述べられている、テイラー主義に根ざした工業化社会の未来像は、ミースが1924年に発表した「工業建築（Industrielles Bauen）」で述べている未来像と重なり合う部分が多く、フォードの建築やそこで描き出された「来るべき世界」が、ミースが自ら思い描いた工業社会のユートピアを再考させるきっかけとなった事も考えられる。

(4) 1925年-1937年のミースの言説に見る建築と時代の関係性

1924年の講演以降、ミースは機能性、機械化、標準化といった時代がもたらす手段を決して否定はしなかったが、これらの概念はもっと上位の目的、精神の問題、のための前提に過ぎないと考えるようになっていたと考えられる。1926年の講演では「建築は精神の決断の空間化であり、それは時代と結びついており、その時代の手段によってその重要な役割を果たすことによって自らを明らかにする」と定義しており、また、今日の技術がもたらす表現の力強さを認めながらも、それは精神の表現とは異なると述べている。1927年の「建築と住居（Bau und Wohnung）展への序文」においては、はっきりと合理的計算による客観的思考の限界が宣言され、モダニズムのリーダーたちの個人的な創造性が近代建築の問題を解決する力として認識されている。1923-1924年の立場がムテジウスの的であるとするならば、1925年以

降のそれはヴァン・ド・ヴェルド的といえ、ミースが当時の建築思想の間を揺れ動いていたことをうかがわせる。この時期のミースの言説の特徴は以下の4点にまとめることができるように思われる。

- 3-① 新しい建築の問題とは人間精神の問題である
- 3-② 新時代とは事実であり、それは選ぶ事は出来ない。むしろ重要な事はこれらの事実に対して如何に我々が自己を納得させるかであり、そこに精神の問題が存在する
- 3-③ 合理化や標準化は時代の必要な前提であるが、あくまで手段であり、それ自体で意味を生み出す事が出来ないがゆえ、美 (Schönheit) のように意味深い (sinnvoll) ものとなり得ない
- 3-④ 近代建築の問題は非常に困難な問題であるが故、計算や組織化ではなく個人の創造力によって解決される

3-①のようにこの時期のミースの建築の定義は時代の空間化ではなく人間精神との関係において語られている。ただし、ミースにとって人間精神の問題とは時代との関連において述べられているため、1923年から24年までの時代の空間化という言説が完全に否定されたとは言えないであろう。一方、3-②は、機械化や標準化などを近代の特質と見ている点は2-②と一致するものの、2-②のようにそれを支持し推進すべきものとして捉えるのではなく、むしろ、好むと好まざるとに関わらず時代の前提として受け入れざる負えないものという立場が示されている。3-③、3-④では、このような時代認識における建築への態度が示されているが、美が精神の問題を解決する建築の基盤にすえられている。ただし、ここでの美はのちにアーマー工科大学の就任スピーチで聖アウグスティヌスを引用し、「美は真実の輝きである」と述べているような理念であり、2-③で否定した美的思索とは一致しない。しかし、2-②、2-③で、提示された極端な技術決定論であった建築観ははっきりと否定され、標準化や、機能性といった近代の特質は建築を作るうえでの手段に過ぎないとされている。同時に、1-④、1-⑤にみられた、構築的原理の徹底を美によって調整しようといった思考もこの時期のミースの言説には見出せない。

この時期のミースの言説には精神の問題という文言がしばしば見出せる。ミースがこの文言を言説において具体的は説明していないが、1930年の「新たな時代 (Die neue Zeit)」において、以下のように述べている

新しい時代とは事実である、それは好むと好まざるとに関係なく存在する。それは、ほか

の時代に比べていいとか悪いとかいうものではない。それは純粹に与えられるものであり、(ほかの時代と)区別できるようなものではないのだ。……われわれは機械化や、タイプ化や標準化を過大評価すべきではない。しかし、経済(システム)や社会条件の変化でさえわれわれは事実として受け入れるだろう。……

これら機械化や合理主義などはその致命的な、価値を欠いた道を進むのである。重要なはいかに我々がこれら与えられた時代の事実に対して自己を肯定するかであり、そこに精神の問題が存在するのである⁹

この言説から精神の問題とは価値を失った近代という時代にかに自己の存在を肯定しうる価値を見出すかということと考えられる。この言説を引用しながらケネス・フランプトン(Kenneth Frampton)はミースの近代にたいする諦念とそれにたいする抵抗の精神が読み取っている¹⁰。しかし、この抵抗は、『フリーリヒト』で述べたような、美的なものによる近代の調停ではなく、近代の有用性の思想と切り離された地点に美という価値を設定することによって行われている。ミースは美が人間精神に価値を与えてくれると信じていた、しかし、この言説から、ミースはそれを人間精神と近代の有用性の思想の二つに分離した世界を統合する調停者とはみなしていなかったといえるであろう。

1925年以降、ミースは機械化や機能性の追及という近代の課題の問題点を認識していたが、このような視点自体は当時においても珍しいものではなかったと考えられる。また、近代の科学主義に対抗するものとして美を取り上げるとい立場も独自のものとはいえないであろう。むしろこれらの言説に見られるミースの独自性とは、これらの課題を時代と美の統合などの形で乗り越えるのではなく、両者を相容れないものとして、並存させたところにあるように思われる。有用性の追及といった時代の条件を建築の前提として無条件に受け入れるとした上で、建築の役割をこれらの課題とは異なる美に見出した点、つまり、まったく相容れない二つの理念を一つの建築に止揚させることなく並存したミースの立場は、従来のモダニズムの建築家としての立場とは大きく異なるように思われる。

(5) 1938年-1969年のアメリカ期のミースの言説に見る建築と時代の関係性

アメリカに活動の拠点移して以降は、言説を発表する頻度が少なくなっている。しかし、その内容は基本的に1924-1937年と大きく相違することはなかったように思われる。ただし、ドイツ期においてミースが意識的であったのは近代の過度の合理性や有用性の追求であったのに対して、アメリカ期においては、近代が生み出す混沌に対抗するといった表現が見出せるのがひとつの特質であるということができよう。このことは、近代の発展に伴うその問題

点の変遷に対応したものであるように思われる。

(6) 言説の変遷

すでに見たように、ミースの言説は、ミースが先進的建築家として活動を開始した1920年代前半には極端な変化が見られたが、1925年以降は若干の変化はあったとしても、その立場は大きく変わることはなかった。1920年代の変遷が、ミースの思考の展開によるものか、八東氏が指摘するような、当時のドイツ建築界での自らの地位確保のための戦略的発言かは明らかではない。一方、1925年以降、すでにミースがドイツを代表する建築家としての地位を得ていた点、ドイツからアメリカに活動の場を移し、発言を控えていった中でも、その基本的立場が変化していない点などから、そこに戦略的意図があったとしても、これらの言説における表現をミースの建築と時代に対する態度を表明したもの見ても問題がないと考えられる。

4. 考察：言説と空間表現

1925年以降のミースの建築理念に見られる二重性は、レトリックとしては成立するが、このような二重性が、実際に建築において反映しうるのであろうか。本研究では言説とほぼ同じ時期に構想され、以後、ミースが追求し続けた空間形式の追及にこのような二重性を可能にする背景が見出せると考える。ミースの空間形式の追求は一元的に捉えることができるものではないが、ごく大きく見て、相互に関連しあっている二つの特質、レンガ造の田園住宅の部屋の解体から始まり、バルセロナ・パヴィリオンにおけるフリースタANDINGウォールの発見により劇的に展開した流動的空間の特質と、1920年代初期のコンクリート造のオフィスビル案ですでに構想¹¹、ワイゼンホフ・ジードルンクのアパートにおける可動間仕切りなどにも見られるあらゆる用途に対応しうる普遍的空間の特質が、アメリカ期に確立されたユニヴァーサルスペースの理念に収束した考えられる。ユニヴァーサルスペースにおいて確立した空間の機能・用途からの開放は、ドイツ期からのミースのひとつの探求目標であった。構想された空間から機能や用途を徹底して切り離すことは、あらゆる機能や用途に対応できると同時に、個別の機能・用途に対応することから建築を開放する。このことによって理論的には、建築空間を近代の有用性のイデオロギーの直接的な反映から開放することが可能となり、建築の表現目的を有用性のイデオロギーでは生み出しえない価値を生み出す源泉としての美とすることが可能となる¹²。用途や機能から切り離された普遍的な空間は、ミースの活動以前にアメリカの事務所ビルにすでに構想されていた。しかしこれらの建築は有用性の理念によって一元的に構成されており、ミースの建築のような理念の意識的な分離による二重性は見出せない。すでに確認したようにミースは自らのユニヴァーサルスペースなどにおけるこのような戦略については一

切語っていない。しかし、このような二重性がミースの建築に普遍性と独自性の並存を可能にしたと思われ、むしろ、このような二重性を可能にする空間形式を構想しえたからこそ、ミースは自らの時代認識をあのように相容れない理念の並存でとどめておくことができたと考えられることのできるであろう。

5. まとめ

言説におけるミースの建築理念は、ミースが40歳前後の1920年代後半に確立され、以降晩年にいたるまでの約40年間変わることなく維持されていたことがわかった。しかし、この段階にいたるまでの1920年代においてミースの言説は表現主義的傾向と即物主義的傾向の間を大きく揺れ動いた。このことが、自らが論理的に展開したものが、発表するメディアや時流に迎合したためかは不明であるが、このような変遷を経てミースは独自の建築観に到達したといえることができるであろう。

ミースは1920年代後半にすでに、有用性の追及などの近代の特質の問題点を認識していたが、このような視点自体は当時においても珍しいものではなかった。ミースの独自性は、まず、この近代の特質がもたらす問題点は建築によって乗り越えられるものではないとして、時代の前提として無条件に受け入れた点にある。そして、この前提を受け入れながらも、建築の表現を有用性のイデオロギーの反映ではなく、有用性のイデオロギーによっては生み出しえない自己の存在を肯定しうる価値をもたらすものである美を反映するものと捉えた点、そして、この二つの理念を意識的に切り離し、止揚することなく並存させ、それを矛盾なく成立させる空間形式を追及し、ユニヴァーサルスペースの理念を構想しえた点に、ミースの独自性があるといえるであろう。

- フリッツ・ノイマイヤー (Fritz Neumeyer), 『Mies van der Rohe: Das kunstlose Wort Gedanken zur Baukunst』 Siedler Verlag, 1986,
- 文献リスト (下表内の文献はノイマイヤー前掲書 p. 298-p. 401より引用)
(文献の日本語訳はすべて筆者 (岩田) が行った。)

ドイツ期				『Das kunstlose Wort』における出典ページ
文献番号	年	言説タイトル	出典	
1	1922	Hochhäuser	Frülicht, 1, no. 4 (1922)	298
2	1923	Bürohaus	G, no. 1 (July 1923)	299
3	1923	Bürohaus	出版されず	299
4	1923	Bauen	G, no. 2 (September 1923)	300
5	1923	Gelöste Aufgaben. Eine forderung an unser Bauwesen	講演 (Dec. 12, 1923), Die Bauwelt, 14, no. 52 (1923) 収録	301
6	1924	Baukunst und Zeitwille!	Der Querschnitt, 4, no. 1 (1924)	303

ドイツ期				『Das kunstlose Wort』における出典ページ
文献番号	年	言説タイトル	出典	
7	1924	Industrielles Bauen	G, no. 3 (June 1924)	306
8	1924	Vortrag	講演 (日時不明1924ごろ)	308
9	1924	Buchbesprechung: P. Tropp, Entwicklung und	DieBaugilde, 6, no. 5 (1924)	310
10	1926	Briefe an >Die Form<	DieForm, 1, no. 7 (1926)	310
11	1926	Vortrag	講演 (March 17, 1926)	311
12	1927	Briefe an >Die Form<: Zum neuen Jahrgang	Die Form, 2, no. 1 + no. 2 (1927)	317
13	1927	Vorwort zum amtlichen Katalog der Stuttgarter Werkbund Ausstellung	The exhibition, "Die Wohnung" from July 23 to October 9, 1927	319
14	1927	Vorwort zur Buchpublikation >Bau und Wohnung<	Bau und Wohnung (1927)	319
15	1927	Vorbemerkung zum ersten Sonderheft	Die Form, 2, no. 9, (1927)	321
16	1927	Vortrag	講演 (March 14, 1927)	323
17	1928	Die Voraussetzungen baukünstlerischen Schaffens	講演 (February 1928)	362
18	1928	Wir stehen in der Wende der Zeit. Baukunst als Ausdruck geistiger Entscheidung	innendekoration, 39, no. 6 (1928)	367
19	1928	Zum Thema: Ausstellungen	Die Form, 3, no. 4 (1928)	367
20	1928	Geschäftshaus Adam	Das Kunstblatt, 14, no. 3 (1930)	368
21	1930	Schön und praktischbauen! Schluß mit der kalten Zweckmäßigkeit	Duisburger Generalanzeiger, 49 (February 26, 1930)	370
22	1930	Über Sinn und Aufgabe der Kritik	Kunstblatt, 14, no. 6 (1930)	371
23	1930	Die neue Zeit	Die Form, 5, no. 15 (1930)	372
24	1930	Programm zur Berliner Bauausstellung	Die Form, 6, no. 7 (1931)	374
25	1931	Rundfunkrede	ラジオ放送 (August 17, 1931)	374
26	1932	Ansprache auf der Jubiläumstagung des Deutschen Werkbundes im Oktober 1932 in Berlin	スピーチ (October 1932)	375
27	1932	Autobahnen als baukünstlerisches Problem	Die Autobahn 5, no. 10 (1932)	377
28	1933	Was wäre Beton, was Stahl ohne Spiegelglas	prospectus of the Verein Deutscher Spiegelglas-Fabriken March 13, (1933) (not printed)	378
29	1935	Haus H. Magdeburg	Die Schildgenossen, 14, no. 6 (1935)	378

アメリカ期				『Das kunstlose Wort』における出典ページ
文献番号	年	言説タイトル	出典	
30	1938	Antrittsrede als Direktor der Architekturabteilung am AIT	就任スピーチ (November 20, 1938)	380
31	1940	Frank Lloyd Wright zu Ehren	the College Art Journal, 6, no. 1 (1946)	384
32	1943	Museum für eine kleine Stadt	Architectural Forum, 78, no. 5 (1943)	385
33	1944	Vorwort zu Hilberseimer, The New City	The New City (1944)	387
34	1950	Technik und Architektur	Arts and Architecture, 67, no. 10 (1950)	387
35	1950	Vortrag	講演 (日時不明1950年ごろ)	388
36	1953	A Chapel. IIT	Arts and Architecture, 70, no. 1 (1953)	392
37	1953	Walter Gropius	スピーチ (May 18, 1953)	393
38	1958	Vorwort zu Rudolf Schwarz, The Church Incarnate	The Church Incarnate (1958)	394
39	1960	Wohin gehen wir nun?	Bauen und Wohnen, 15, no. 11 (1960)	396
40	1961	Dankrede im Sender. The Voice of America	ラジオ放送 (1961)	397
41	1963	Rudolf Schwarz	寄稿 the catalog of Rudolf Schwarz memorial exhibition in Cologne (1963)	398
42	1965	Nachruf auf Le Corbusier	追悼 (August 27, 1965)	398
43	1965	Peterhans' Seminar für visuelles Training der	Mies van der Rohe, Lehre und Schule (1977) (Chicago, February 5, 1965の署名あり)	399
44	1965	Baukunst unserer Zeit	Mies van der Rohe, Die Kunst der Struktur (1965)	400
45	1965	Leitgedanken zur Erziehung in der Baukunst	Mies van der Rohe, Die Kunst der Struktur (1965)	400
46	1969	Walter Gropius 1883-1969	追悼 (August, 1, 1969) Deutsch Bauzeitung, 103, no. 12 (1969)	401

- 3 八束はじめ『ミースという神話 ユニヴァーサルスペースの起源』彰国社 2001年 p. 12
- 4 それまでに、彼が作成した建築計画の中でもっとも近代建築の表現に近いと考えられるクローラー・ミューラー邸でさえ、展覧会に応募した際グロピウスによって拒否されている。
- 5 ノイマイヤー, 前掲書, p. 28
- 6 ジョン・ウィレット (John Willet) 『Art and Politics in the Weimar Period: The New Sobriety 1917-1933』Da Capo Press, 1996, p. 67
- 7 ノイマイヤー, 前掲書, p. 186
- 8 ノイマイヤー, 前掲書, p. 309
- 9 ノイマイヤー, 前掲書, p. 309
- 10 ケネス・フランプトン (Kenneth Frampton), 松畑強+山本想太郎訳『テクトニックカルチャー 19-20世紀建築の構法の詩学』TOTO 出版, p. 242
- 11 シュルツによれば, 1920年代初期という時点で空間を普遍化すべき要素として扱うことに気づいていた。また, フーゴー・ヘーリングとの議論において, 機能の不明解性や変化の可能性を指摘している。フランツ・シュルツ (Franz Schulze) 澤村明訳『評伝ミース・ファン・デル・ローエ』鹿島出版会 1987年, p. 109
- 12 ただし, このことは, ミースの建築が実際に有用性のイデオロギーに対抗していることを意味しない。普遍的な空間を作ることによって, 有用性のイデオロギーと建築理念が切り離されているに過ぎない。